



「さきいかの恋」



※とりあえず脱稿



蜂須賀 双六

さきいかの恋 1

『さきいかの恋』※とりあえず脱稿

■ 舞台設定

新幹線の車内。

後半に一度、喫茶店の店内。

それにて終了。

音響は、電車の進行音はあってもよし。

なくてもOK!

エンディングに、なんか曲、入れましょう。

■ キャスト

40代の中年男・・・・・・・・工藤新一

女性・20代後半かなあ、かわいい系・・・・・・・・ミヤコ(工藤の逃げた女房・サトミ)

※ 「ミヤコ」さん演じる女優さんは二役演じます。

若い男駅掌・鶏がらのような細身、めっちゃ若い、おどおどしてる・若い駅掌

女性・30代前半かな、細身セクシー系?・・・・・・・・マッキー

女性・30代後半、太め・・・・・・・・カズミ

顔がおにぎりに似てる30代前半、男性・・・・・・・・オムスビ

車内販売員の女子大生・・・・・・・・名なし

公安員ガニマタ・・・・・・・・銭形警部みたいなやつ

デブ駅員・・・・・・・・でぶの中年車掌。名前、花岡実太

京都から着物姿の老人男・・・・・・・・着物男

京都から着物姿の老人女・・・・・・・・着物女

京都から大男・・・・・・・・ホッピー若狭

外国人風の女ダンサー5～10人※1人は車内アナウンサー役もやる

40代後半くらいのスーツ男1人

ネズミ色のジャンパーの初老の男※喫茶店経営者役もやる。

青森100年イカの男性社員3名※テレビの競馬中継アナウンサー役、キックボクシングのアナウンサー、解説者役もやる。

と、大筋は、こんな感じ、かなあ。

出演者のみんなと話し合っ、いろいろ考えてみましょうよ。

問題はセットなんだよなあ。

新幹線車内と喫茶店の2セット。

アイデア募集中。

■ 台本

舞台は新幹線の車内。

これから、もう、ずーと、ずーっと、新幹線の車内ざんす。

そこに突如、しわくちななスーツ、よれよれのネクタイ、ぼさぼさ頭の中年男、登場。

彼こそは、このドラマの主人公・工藤新一。

二日酔いなのに、駆け足ダッシュで乗り込んできた感、満載。

両肩で、大きく息をついて。

片手にはコンビニの白い袋。

その袋には、さきいかのパックと缶ビール在中。

こんな中年の状態に関係なく、平然と流れる車内アナウンス。

アナウンサー「今日も、新幹線をご利用いただきまして、ありがとうございます。

この電車は、のぞみ10号、博多行きです。

途中停車駅は、品川、新横浜、名古屋、京都、新大阪、新神戸、岡山、広島、新山口、小倉、博多の順に、停まります。

Ladies and gentlemen,Welcome to this shinkansen.

This is Nozomi super express.Bound for Hakata」

このアナウンスはBGMと同じなので、

黙って聞く必要なく、役者は、どんどん進むべし。

工藤「ほえー・・・なんとか間に合ったな、と。ふう。

えーっと、13号車は、ここだよな。C12、C12?」

と、座席を探すと背後、窓際の座席に1人の女性・ミヤコ。
はっ、と目が合う2人。

ミヤコ「あ、すいません。こっち、ですね」

工藤「あ、す、すいません」

と、工藤は窓際へ、ミヤコは通路側の座席へ。

お愛想笑いが、これまたキュートなミヤコ。

おー、これはラッキーと、照れ笑いの工藤。

発進のベルが鳴り、動き出す新幹線。

とりあえず、という感じで、手に提げていた白いコンビニのビニール袋から、
缶ビールを取り出す工藤。

栓を引くと、猛然と爆発する缶ビール。

ぶしゅゅゅゅゅゅゅゅー—————っ、と、もう噴水状態。

もう、まわりは、泡だらけだ。

工藤「うわあああああー！」

ミヤコ「きゃああああー！」

工藤、あわてて立ち上がると、頭上の棚に激しく頭をぶつける。

工藤「あ、行ってえー！」

と、さらに、片手に持つてる缶ビールをカズミに大量にふりかけてしまうことに。

工藤「あっ、あああうー！」

ミヤコ「うひょーん！」

工藤、ポケットから、使用済みのしわくちやなちり紙を取り出して、

ミヤコの頭や服に飛び散ったビールを拭く。

工藤「ああ、ああ！こりゃ、これは、ああ、すいません、すいません、すいません！申し訳ござ
いません！」

ミヤコ「それ、これ、なに、それは、いやーん、うひょーん、やあああああー！」

少し離れた斜め前の座席の、PCに向かって必死こいて文章を書いていたオムスビ、突如、立ち上がり、振り向いて怒鳴る。

オムスビ「うるさいうるさいうるさいーい！おい！うるさい、んだよ！！」

びっくりしてミヤコと工藤、その場に直立。

工藤、またしても頭を痛打。

工藤「あっ、いってえーー」

思わず笑い出してしまうミヤコ。

が、しかし、オムスビ、さらに激怒。

オムスビ「なにやってんだ、おまえはよお！静かにしろ、って言ってだよお！」

工藤「あ、ああ、すすすす、すいません」

頭をおさえて、ゆっくり座る工藤。

その姿を横目にしながら、くくくく、と、ビールまみれなくせに必死で笑いをおさえるミヤコも、ゆっくり席に腰を降ろす。

工藤、あ、と再び気づいたように片手に握りしめていたままのティッシュで、またミヤコの服を拭こうとする。

が、しかし、ミヤコは、だいしょうぶ、という仕草で、自分のバックからハンカチを取り出す。

工藤「あ、そうだ。コンビニで、めずらしいサキイカ、買ってきたのですよ。青森100っていう。なんだか、わかんないんですけど、おいしそうですよ。たべます？」

ミヤコ「ああ、いいですね。ビールにあいますね」

工藤「あ、そしたら、ビール、買いましょう。ちよっ、ちよっと待つて」

ここに若い駅掌、めちゃくちゃ、おどおどしながら登場。

さきいかの恋2

若い男子駅掌「すみません、乗車券を、拝見させていただきますう・・・」

工藤、ミヤコも、それぞれに乗車券を提示。

赤い判子が押される。

斜め前、オムスビ、イラつきながら乗車券を示してる。

ミヤコはハンカチでスカートなんかを拭いてる。

工藤「ほんと、なんか、すみません」

ミヤコ「いーんですよ。これくらい。あたしなんか、もう、どーなったって、いーんですから」

工藤「えっ？」

ミヤコ「どちらまで、いかれるんですか？」

工藤「小倉まで」

ミヤコ「あ、あたしは博多まで。それじゃ、ずっと一緒ですね」

工藤「あっ、そうですか・・・ああ、あ、どうぞ、よろしくお願い申し上げます。あ、ご実家が、博多なんですか？」

ミヤコ「いえ、ぜんぜん」

工藤「えっ？では、なぜに？」

ミヤコ「めんたいこ、食べにゆくのです」

工藤「めんたいこ？」

ミヤコ「どんこつラーメンも食べます」

工藤「はあ？」

ミヤコ「失恋しました。もう、やけ食いです。10キロぐらい、ふとってやります。もう、食いまくりまくって、もう、飲みまくって、道端に倒れます。こんなわたしでも、拾ってくれる人がいるかも知れません」

工藤「えっ！そんな！そんなヤケを起こしてはなりませんぞ姫！」

ミヤコ「えっ、なんで時代劇？」

工藤「ああ、すみません、残務整理で、徹夜でやってまして。そんなときテレビで『隠し砦の三悪人』やってて。なんか、みちゃって。まあ、そんなことは、どーでも、いーんですけどお。そのお、あなたのようなね、超絶かわいい方が、ですよ。決して道端に倒れたりしては、決してなりませんぞ！」

ミヤコ「あたしなんて、そんな、かわいいわけではないですよ」

工藤「いやいやいや、そんなことは、ない！」

ミヤコ「かわいーわけではないですよ！だったら、フラレるわけではないから」

工藤「それは、その男が、ばかなんです！」

オムスビ「うるさい！うるさい、って、いってんだよ！」

工藤「ああ・・・すすすす、すいません・・・はあはあ」

ミヤコ「あ、お、怒られ、ちゃいましたね」

工藤「それにしても・・・なにをイラついてやがんのかなあ」

ミヤコ「はい？」

工藤「だから、あいつですよ・・・オムスビみたいなツラしやがって」

ミヤコ「あは！あたしも、ずーっと、そう思っていました」

工藤「あはは・・・やっぱり」

ミヤコ「うっしっしっ」

通路に車内販売が通過する。

女子販売員「品川名物、かめやまんねん堂のあほなは、お菓子のホームラン王です。品川名物、かめやまんねん堂のあほなは、お菓子のホームラン王です」

工藤「ああ、すす、すいません。ビールを。ふたつ。はい」

と、こーして、缶ビール2本買いました。

そして1本を、ミヤコに渡す。

ミヤコ「あ、いーんですか？」

工藤「もちろんですとも。あ、じゃあ、ま、乾杯」

ミヤコ「真昼間、この、ぷしゅっ、ていうの、いーですね！休日感、満載ですね」

工藤「あはは、あっ、サキイカ。あ、あれっ？なんだこれ？あきまへん。あつれー、なんで、これ？むーん・・・」

ミヤコ「ん？ちょっと、貸してみてください。ん？あれっ？んーーーーー！」

と、チカラをこめてサキイカの袋を引っ張る。

と、手がすべって、右手に持っていた缶ビール、そのビールが、どぼっ、と工藤の顔へ。

ミヤコ「あっ！」

工藤「わあ・・・」

思わず、笑い出す2人。

工藤・ミヤコ「あはははは！」

オムスビ「おい！」

工藤・ミヤコ「あっ、はい。すいません・・・」

工藤「うっししし。こっちはねー、こんな美人さんとねえ、いちやいちやラブラブしてるもんだからねー、やきもち焼いてやがんの。オムスビ」

ミヤコ「小倉へは？お仕事、ですか？もう、仕事なんかやめて。あたしと一緒に、めんたいこ食べにゆきませんか？」

工藤「えっ！」

ミヤコ「ずっと、一緒に、のみまくり、くいまくりまくって、2人で体重増やしませんか？」

その一言を聞いて、もう、工藤、呆然自失状態。

アナウンス「この電車は、間もなく新横浜に到着いたします。

This train soon will be arrive at the Shin-Yokohama.」

ゆっくり、ミヤコが工藤へカラダを向ける。

ゆっくり、密着してゆく。

思わず、抱きしめてしまおう、と工藤がした瞬間、ミヤコのほうが、がぼっ、と窓へ。

ミヤコ「マッキー、カズミさーん！」と、ホームに向かって手を振っている。

マッキーとカズミ、乗り込んできて、向かい合って2人の前に座る。

マッキーが工藤の正面。

空間が狭くなったし、ああ、なんで、おれは、まだ、このビールの空き缶を持ってるままだらうか、と我にかえったような感じで、その空き缶を自分の足元へ。

工藤、前屈みになります。

すると、そこにミニスカ・マッキーのふともも。

まるで、パンツを覗きこむような体勢になってしまった工藤。

なに？という感じで、ちょっと眉間にシワを寄せるマッキー。

あっ、あらら、こりゃ、すんません、みたいな工藤。

あれっ、誰なんだろう、という感じで、マッキーとカズミは工藤に向かって愛想笑い、軽い会釈みたいな、そんな雰囲気。

カズミ「あのう・・・どーゆー・・・」

と、すずしい顔のまんまのミヤコに囁く。

ミヤコ「ん？ああ、たまたま、偶然。隣の人」

聞き耳を立てていたマツキーも、なーんだ、そーいうこと、というような感じ。

ああ、すいません、というバツの悪い苦笑いの工藤。

気を使って損したわ、みたいなマツキーの横顔。

一方、カズミだけは急に笑顔、輝く。

カズミ「がはは！そーなんだあー！がはははは！いやあ、あれですよ、昔から、ほら、よく言うじゃないですかあ、通りすがりも縁のうち、みたいな！ねっ、ねっ！これも、なにかの、ご縁ですよね！どちらまでゆかれるんですか？お仕事かなんかですか？」

カズミが大声なので、斜め前方に座ってるオムスビが、きつ、とした顔つきで、工藤たちのほうに目を向けた。

なので、工藤とミヤコは気がきじゃない様子。

また、いつ怒鳴られるか、わかりやしないぞ、これは、みたいな。

が、しかし、カズミは、そんな事情は、まったく知らないわけで、相変わらず明るく元気な大声が続く。

カズミ「あっ、ああ、お名前は、お名前聞くの忘れてたわあー、あたしったら、やあねえ、もおー、あ、あたしは、カズミです。で、こっちは、マツキーです。前の職場の仲間なんですけどね！みんなで失恋ツアーなんですよお、もお、ぼぼあとぶすどもとでぶがねえ、あっはっはっはっ、もお、いやあねえ、あ、ああ、で、あのお、お名前は？」

工藤「あ、あのお、わたくしは、く、く、く・・・」

なにぶん、声を殺してしゃべらなければならない、ので、こんなふうになる。

工藤「くっ、くっ、く・・・」

マツキー、カズミは事情がわからないので、だんだん顔が、ひきつってくる。

ミヤコはわかってるので、隣の席で、そら、がんばれ、的なエールを送ってる。

工藤「くっ、くっ、くうー・・・」

カズミ「ど、どこか、ぐあいが悪いんですか……」

あたしの目の前で吐かないでよ、みたいな態度に急変化するマッキー。

工藤「いやいやいやいや、そーいうことではなくて。じじじ、自分の名前は……くっ、くっ、くくくく……」

カズミ「あははは！わかったあー！それ、森進一の真似ですか！あははは、ふるー！まだ生きてましたっけ、森進一」

すると、工藤、足元においてた空缶に足先がぶつかって、マッキーの足元へ、ころころころころー、と。

あわてて、それを拾う工藤。

そのまま工藤の顔面、マッキーの股間へ。

ずぼーん、と。

マッキー「わあー、ちょっと！」

工藤「ありやりやりや！こりや、これですこれです！」と右手に掴んだ空缶を示す。

工藤「もう、転がらないように」と空缶を右足で踏み潰し、さらに、それを自分の尻の下へ、で、座ると、尻に潰れた空缶のとがった部分が刺さる。

工藤「あっ、てえー！と、前につんのめって、マッキーの胸に顔面を深々と埋めてしまう。

マッキー「なんだよー、てめえー！」

工藤を突き放し、座ったまま思いつき右足で蹴り込む。

と、こーして、マッキー怒って、後ろの座席へ行ってしまう。

マッキー「ちかん！ヘンタイ！」

工藤「いや！あっ、あああー！」

オムスビ「うるさいうるさいうるさい、うるさい！なんなんだよ、おまえら！うっせえんだ

よお！しずかにしろおー！」

もう、満を持して立ち上がって怒鳴るオムスビ。

このあたりまでの展開は、古典的な、クレイジーキャッツとかドリフのギャグ構成と同じ。
さあ、演者諸君、存分に会場の笑いを、掴んで乗ってください。

工藤、直立不動。

工藤「あ、あ、す、すいません」

ゆっくりと席につく。

そのとき、おれは、なんで左手にティッシュを握ってんだろうか、と。

まあ、いいや、と、そのティッシュで自分の額のあたりの冷や汗を拭ったりする。

車内販売員、カートを押しながら、やってくる。

販売員「横浜名物～、お家系ヨコハマとこつラーメンまんじゅう、お家系ヨコハマとんこつラーメンまんじゅうは、いかがでしょうか～」

カズミ「あっ、すいません！それ、それ、ください！あ、あと、うーん、と、あ、かめや万年堂のあほな、と。あ、あと、鉄板エビセン。あと、ネオゼネシス元祖エヴァンゲリヲンえだまめ。うーん、と、あ、あと、あと、ビール4本とタマゲタ缶チューハイ4本ください！ほらほらほらほら！旅行なのよ、りよこーよ！ぱーっ、と、いきましようよ、ねっねっねっ！たのしー、りよこーの、はじまりなのよおー、ねねね、乾杯しましょうよ、乾杯。ほらほら、マッキーも、こっち戻ってきなさいよ、もう、さささ、みんなでね、乾杯、乾杯、おっほっほっほっー！」

が、マッキー、動かず。

ふてくされた顔のまま、スマホいじってる。

カズミ「あ、あっ、で、で、あたしはカズミ。この、うとうと、居眠りしてんのがミヤコ。で、後ろのがマッキー。前の職場で一緒だったんですよ。とくよう、で。あ、特別養護施設。老人ホームです。そこで介護とか介助とか、リハビリとか、そういう仕事。まえは、みんな東京だったんですけど、いま、あたしとマッキーは神奈川の施設に異動になって。

あ、それで、お名前は？」

工藤「く・・・工藤、です。はい」

隣のミヤコは、もう、すっかり居眠り中。

カズミ「お仕事は、どんな？」

工藤「いやあ・・・麻婆豆腐屋を、やってたんですよ。仲間たちと一緒に」

カズミ「麻婆豆腐・・・あ、らーめん屋さん！あー、美味しいですよ、らーめん！」

工藤「あ、いや、麻婆豆腐だけのお店で。なんでか、っていうと。らーめん屋さん、って、すごく多いじゃないですか。だから、まあ、差別化ということで、うちは、麻婆豆腐だけの店でやろう、って。そういうことで。いや、絶対、自信あったんすよ。でも、やっぱり、それじゃ、うまく行かなくて。つぶれちゃいました。はい」

カズミ「ああ・・・やっぱり」

工藤「いやあ・・・はあ・・・。たいへんですよ、もう・・・仲間同士、ケンカなっちゃっうわ。借金山盛りだし。ニヨーボーは小倉の実家に帰っちゃうし。ニヨーボーの実家からも借金しちゃってるし。で、これから、小倉、いくんですよ。いろいろ話し合いしなきゃいけないから」

カズミ「ああ、そーいうことなんですかあ」

工藤「はい」

カズミ「まあまあ、ほら、人生、八転び七起き、って言うじゃないですか！八回転んでも、七回立ち直れば、いいんですよ！」

工藤「えっ？あ、あれ？一回、足らなくないっすか？たおれっばなし？」

カズミ「まあ、なんでも、いいじゃないですかあ！さあ、元気だして！元気がなければ、なんにもできない！アンモニア猪木さんも、そう言ってるじゃないですかー！あ、死にました、っけ？」

工藤「いや、まだ生きてると思います」

カズミ「あっはっはっはっ！まあまあ、さあ、元気元気！」

オムスビ「だーら、うっせーんだよ、この、でぶが！」

ミヤコ「でぶ！」

この一言で目覚めるミヤコ。

マッキー、ミヤコ「あっ！」

ミヤコ「あー！」

マッキー「やばい、やばい、泣いちやうから、泣いちやうから」

オムスビ「でぶ！」

カズミ「エーーーーーン！」

マッキー「ああ！泣いた！」

ミヤコ「やっぱり！」

カズミ「エーーーーーーーーーん！」

マッキー「あんた、責任取りなさいよ！」

と、マッキー、なぜか工藤を指差す。

工藤「えっ、お、おれ？」

マッキー「女の子、泣かせちゃったのよ！きちんと責任取りなさいよ！あんた、それでも男なの！」

工藤「えっ！」

オムスビ「女の子？」

ミヤコ「でぶぢゃない。ぽっちゃりだって、言ってあげてください」

工藤「えっ！」

ミヤコ「きみは、でぶなんかじゃない。ぽっちゃりだ、って。そう言ってあげてください」

工藤「あ、いやあー……しかし……」

ミヤコ「言ってあげてください！」

工藤「ええええ……あ、あのう。ぎり、ぽっちゃりですから」

カズミ「ひっくひっく……えー——ん！」

マッキー「あんた、ばかあ！」

ミヤコ「ぽっちゃりで、かわいいよ、って」

工藤「えっ！」

ミヤコ「ぽっちゃりしてて、かわいいよ、おまえ。あいしてるよ、って」

工藤「えっ！」

マッキー「言え！」

オムスビ「すぐ！もう、すぐ！」

工藤「えっ！」

カズミ「びええええええええ——ん！あうあうあうあう——！」

工藤「だいじょうぶ！かわいい！もう、ぽっちゃり、かわいい！」

カズミ「ほんとうですかあ——！」

速い立ち直り。もう、すっかり、笑顔満面。

カズミ「おーっ、ほっほっほっほっ！乾杯しましょ！乾杯！あ、あ、そちらの、オムスビさんも、ご一緒に、いかがですか？」

オムスビ「だれがオムスビやん！」

マッキー「あのさあ。さっきから、ずーっと気になってんだけどさ。おにぎり、でしょ？オムスビ、って、言う？」

カズミ「あら？そうよねえ。おにぎり、ですよ。おにぎり。なんでオムスビかしら？」

オムスビ「おまえら、いったい、なんの話してるんだ」

工藤「あやー・・・言いません？オムスビって？では、こちら、お集まりのお客様方たちに、お聞きしてみましよう」

と、工藤、客席に出て行って、観客に聞いてみる。

やっぱり具は、明太マヨですか、とか。

ノリは、しめってる派ですか、ぱりぱり派ですか、とか。

という、そんなパフォーマンス、入れる。

観客のリアクションに合わせて、落ち着いたら工藤が舞台に向かって言う。

工藤「ということで、俵さーん、スタジオにお返ししまーす」

カズミ「あのおー、このサキイカ、あけちゃって、いいですか？」

工藤、舞台に

さきいかの恋3

工藤、舞台に戻って、自分の座席に着席。

ストーリーに戻りましょう。

工藤「いやあ、それが、どうしても開かないんですよ」

カズミ「うーん！うーーーん！」

まま、そーして、ほどよく、公安とデブ駅員、通路にやっこようか。

マッキーは後ろの座席で不機嫌なまま、脚組んで窓の外を見てて。

カズミは工藤に話しかけてる雰囲気。

ミヤコは、なにやら、にやけ顔で、ぼーっ、と宙空を見てる。

オムスピは必死こいてPCに向かい中。

デブ駅員「えっえええっー！それは、ほんとうですかあ！」

公安「大きな声を出すな！まわりに聞こえるだろう？これは極秘情報なんだ！」

デブ駅員「ああああ、あうあう・・・すすすす、すいません」

公安「ふっふっふ・・・ああ、そうともさ。ほんとだともさあ。昨夜だよ昨夜。じっちゃんが、おれの枕元に立ったんだ」

デブ駅員「えっええええっー！あの伝説の、銭形ヘイジの斜め前の長屋に住んでいたという由緒正しき先代の名を受け継ぎ、過激派数十名が完全武装しながら目の前を通りすぎても、まったく気づかなかったという、あの有名な鉄道公安・ガニマタゆくぞお様が！」

公安「そうともさあ。あの伝説の、鉄道公安ゆくぞうが、孫のおれのガニマタくるぞお様の夢枕に立ったのさ。ふっふっふ。で、お告げがあった！」

デブ駅員「そそそそ、それは、なんと！？」

公安「10月10日10時東京発のぞみ10号に、いまだかつて見たことのない凶悪犯が乗車する、と」

この瞬間、乗客全員、なんとなく、この2人の存在に気づき、彼らの会話を盗み聞きし始める。ただし、ミヤコだけは、宙空をぼんやり見詰めたまま。

デブ駅員「そそそそ、それでそれで、そいつは、いったい、どんなにか恐ろしい凶悪な悪事をしたのでしょうか！？」

公安「過去の日本犯罪史上、かつてない！こんな大犯罪は、ない！それは、それは、それは・・・もう、あーんなことや、こーんなことや、そーんなことまでもが、もう、くちにすることもすらも、おぞましい！」

デブ駅員「あうあうあうあああ———・・・」

公安「まさに今日、おれは、そんな極悪人を、逮捕する！」

デブ駅員「ででで、おおおおお告げによりますと、そそそそいつは、どんな風貌のやつですか！」

公安「うむ！お告げによると！」

デブ「お告げによると！？」

公安「それは、もう、誰が見ても凶悪犯だとわかる風貌、とのことだ。即、逮捕だ！」

デブ駅員「そそそそ、そーなると、テレビの取材なんかも来ますね！」

公安「そりゃあ、来るだろう。なんといっても、かつてない、大手柄だからな」

デブ駅員「今夜のニュースで放送されますかね？」

公安「そりゃあ、放送するだろ。1番をつけても2番をつけても3番をつけても、みんなみんな、ぜーんぶ、もう、大画面だあ」

デブ駅員「ドキュメンタリーのドラマとか、映画にも、なりますかね？」

公安「そりゃあ、なるだろ」

デブ駅員「自分なんかも、インタビューされますかね？」

公安「え？」

デブ駅員「わたくしは、有名人になることが、子どもの頃からの夢でした。ダンスも、やりました。ハードロックの歌手を目指したこともありました。みんなに注目される、あこがれの有名人です。そんな、わたくしの長年の夢が、ついに・・・だから、ずっと、練習してきたのです。見てください！どうですか、これ！」

と、片手に持っていた色紙を公安に見せる。

公安「これは？」

デブ駅員「サインです」

公安「はなを・・・かじった？」

デブ駅員「ちがいます！はなおか・じった、です！」

公安「はなおか・・・じった」

デブ駅員「ちがいますよ！花岡実太です！」

公安「だから、はなおかじった、でしょ？」

デブ駅員「違いますよ！もう、やんなっちゃうなあ！さあ、いきますよ」

公安「えっ？くいんとりつくす、みたいな。わかるかなあ、わかんねえだろうなあ」

と、にやりと観客にあやしく笑いかけ、デブ駅員を追うように舞台を去る。

と、いうことで、2人、引き下がる。

カズミ「ねっ、ねっ、ねっ、聞いた聞いた？いまの聞いた？ねえ、ミヤコ！凶悪犯ですってよ、凶悪犯！」

ミヤコ「えっ？なにがー？」

カズミ「すぐ、ここ！ここで、いま、話してたじゃないの！」

ミヤコ「だれがー？なにー？ぼーっ、としてたから、わかんなかった」

カズミ「もう！だから！」

工藤「まあまあ。

ここでオムスビ、激怒、立ち上がって怒鳴る。

オムスビ「だから！しずかにしろ、って、言ってんだよお！この、でぶおんな！」

ここで、すかさず、工藤、立ち上がって謝罪。

工藤「あ、ああー！すいません！すいません！そこまで！そこまで！」

まあまあ、まあまあ、という感じで、オムスビをなだめる工藤。

オムスビも、なんとか、こらえて。

2人、それぞれに、ゆっくりと着席。

カズミ「いま・・・でぶ、って、言いました？」

工藤「言ってない！言ってない！だいじょうぶ！だいじょうぶ！」

マッキー「あたし聞こえたから。でぶ、って言った」

工藤「ええ！」

カズミ「ううう・・・ひっく、ひっく・・・ううう・・・」

工藤「ちがうちがうちがう！落ち着いて、落ち着いて！あっ、ひよっとして・・・あいつが凶悪犯かも知れない！」

と、オムスビを指差す工藤。

ミヤコ「それは違うと思うな」

工藤「えっ・・・。ままま、乾杯しますか、乾杯」

アナウンス「この電車は、間もなく京都に到着いたします。

This train soon will be arrive at the Kyouto.]

ミヤコ「あれ？名古屋は？名古屋はなしですか？」

工藤「はい。この本の作者が、名古屋は味噌カツと売春しかないから飛ばす、って。トヨタがスポンサーにでもならない限り飛ばし続ける、って。ずいぶん、たかびーなことを、ぬかしています。究極の貧乏人ってのは、おそろしいですね。中途半端なカネなら、いっそ、いらぬから、って。あのひとの人生、ゼロか100しかないんで」

カズミ「なるほど、ですね。で、劇中は、いま京都に着きましたね」

工藤「はい」

で、着物姿の老夫婦、乗車。

着物ジイは、仏頂面。しかめつら。

着物バアは、ニコニコ。

愛想よい、ひとなつこい、そんな感じ。

ここにホッピー若狭も、入ろうか。

大柄な、いかつい男ですよ。

でっかいバック持って。

もう、殺気が、みなぎってる。

着物ジイは工藤たちの斜め後ろ、窓際にジイ、通路側にバア。

大男は、この老夫婦の後ろの座席。

大男こと、ホッピー若狭は、がにまたで、どかつ、と座り、両腕を組んで中空を睨んでる。

若狭の、ただならぬ殺気に、みんな、なんとなく緊張。

が、しかし、ミヤコだけは奇妙な表情。

若い駅員「す、すみません・・・ああああああ、あのお、じよじよ、乗車券を、拝見しますう」

もう、緊張しまくった、蚊トンボのやふな、若い駅員再登場。

ホッピー若狭の横に立つ。

もう、びびりまくりの駅員。

完全シカトの若狭。

若い駅員「あのお・・・じよ、乗車券を・・・そのお・・・」

若狭「なんだよ、こらあ。乗車券だとおー！持ってるわー、そんなもん！」

若い駅員「ああ、すす、すいませーん」

びびっちゃって、乗車券を確認できず、若い駅員、そのまま隣の老夫婦のところへ。

着物バア「お仕事、大変ですね」

と、乗車券を提示。

若い駅員「はあ、ありがとうございますう」

と、パチン、パチンと印をつける若い駅員。

カズミ「なんだか、やねえ」

と、工藤に囁く。

が、工藤はオムスビのほうを睨んでる。

カズミ「ああ、そのサキイカ。気になっちゃって、気になっちゃって。なんで、あかないかな？」

と、カズミ、サキイカ開封に再挑戦。

カズミ「これ、なんで、あかないかなあ。ねえ、誰か、ハサミ持ってない？」

ミヤコ「あたし、持ってない」

カズミ「ねえ、マッキー、ハサミ持ってない？」

マッキー「持ってない」

カズミ「つめ切りとか？」

マッキー「ないない」

着物バア「あ、ハサミなら、わたし、持っていますよ」

すると着物ジイ、突然、怒鳴る。

着物ジイ「まったく！けしからん！いまの若い女たちは、裁縫道具も持ち歩かんとは！一時が万事。身だしなみ、生活習慣の乱れ。そんなところから、日本の大切な伝統のひとつひとつが、失われてゆくんだ」

着物バア「また、はじまった」

着物ジイ「日本人の美徳、道德観、美しさ。まるで、わかっていない！」

若狭「そのとおりだ！さっきから、むしずが走る！なんだい、あのオンナ！くっせえんだよ、そ

若狭、わなわな震えながら、ゆっくり立ち上がる。

若狭「くっ・・・くそったれが・・・あんなもん、ハサミなんかなくても、あけてりますわー！」

そうして若狭、呆然と立ち尽くす工藤の右手に握っていたサキイカの袋を掴む。

若狭「貸してみい！」

と、若狭、思い切り、サキイカの袋を両手で引きちぎる、はずだった。
が、しかし、なんとしても、サキイカの袋は、やぶれない。
切れない。開かない。

若狭「な、なんやこれ！そそそそ、そんな、あほな！うぬぬぬぬぬぬー！そんな、あほな！ベンチで250キロあげちよる、わしのチカラが！あほ、ぬかせいや！魚おおおおおおおおおー！」

通路のど真ん中で、ガニマタで、両手にチカラをこめて、思いっきり袋を左右に引っ張ってる若狭。

そして、ついに、若狭、ぶりぶりぶりー！と、屁たれる。

全員「うわあー！」

マッキー「なに食ってんだあ！おめえー！」

オムスビ「目があ、目が、痛い！」

着物ジイ「息が、息が・・・できん・・・」

着物バア「あなた！あなた！しっかり！」

着物ジイ「はあはあ、窓が・・・窓が、あかない・・・」

工藤「いや、新幹線は、あかないから」

若狭「われながら、こらあ、あかん・・・いや、精つけな、あかん思うて、にんにく増し増し増しのてんこ盛り肉肉ホルモンらーめん食うてきたさかい・・・」

と、若狭自身も、立ちくらみ。

そこにカートを押した販売のおねえさん、入ってくる。

販売員「京都名物、なら漬け、な、な、おならづけ……あ、ああああ……」

と、販売員のおねえさん、毒ガスで、よたよたと倒れこむ。

工藤、駆け寄り、抱き起こす。

工藤「しっかりしろ！」

オムスビはハンカチで口元を抑えながら、向こうのほうから叫ぶ。

オムスビ「気を、気をたしかにもつんだ！」

若狭「ええい！みんな、しっかりせい！人の屁で、人は死なん！だいじょうぶやん、屁で人は死なん！」

ミヤコ「いやあ、これは、わかんないですよお」

若狭「しっかりせい！問題は、これや！こいつを、あけなあかんのや！そうや、これは、これは、わしの人生、そのものなんや！」

工藤「ど、どういうこと？」

若狭「わしはなあ……今日、命懸けでのお、この電車に乗ってまんのや」

全員「えっ！？」

若狭「どういうわけなのか、このサキイカの袋が開かせんと、なんや、自分、ダメなりそうな、そんな気が……」

なぜか、うるうるしてる若狭。

工藤「あっ！おお、おれ、ライター、持ってます！ライター、これだ！これで燃やそう！」

若狭「そりゃあ、いい！今のわしの気分ぴったりや！わしは大阪なんやけどな、京都、いつてきたんや！清水寺、いつてきたんや！命懸けでな、今夜、飛びたつ気分や！燃えて、燃えて、燃えて、イノチ燃やして、人生の晴れ舞台、飛びたつたわ！」

若狭、片手に握る百円ライター。

オムスビ「あっ、待て！大阪府は今朝未明、ビニール袋不燃日を発表。不燃日は毎月第二月曜日と水曜日。ダイオキシン発生抑制のため、世界的環境保護団体イエロー・ピースと大阪主婦連合会が国際契約締結！」

工藤「な、なにに？」

オムスビ「いま、そこ、テロップで！」

若狭「い、いま、ここ、どこなんだ、大阪に入ったのか！」

カズミ「わかりません！田んぼ、ぼっかりです！」

ミヤコ「ここはどこ！あたしは誰？」

若狭「ええい！くそっー！」

と、若狭、手にしてた百円ライターを床に叩きつける。

着物ジイ「この大バカモノどもめがあーーー！」物事の本質を、大きく逸脱まくっている！問題は、ハサミじゃ！ハサミなんじゃよおーーー！」

若い駅員「すすす、すみません。じよ、じよ、乗車券を拝見させていただきますう」

と、びびりまくって若い駅員登場。

若狭「おお！あいつや、あいつがハサミを持っている！」

と、若狭、ショッピング・カートを押しのけ、猛然と若い駅員に襲いかかる。

販売員の女「あれええええー」と、気を取り戻して立ち上がりかけてたところを、突き飛ばされて、工藤と共に再び床へ倒れ込む。

カートに並べられていた商品が、ばあつ、と床に散乱。

が、若狭、そのまま、その先にいる若い駅員へ向かって突進。

若狭「か、貸せ！」

と、若い駅員が手に持つそれを奪い取り、サキイカの袋をはさむ。

若狭「あ、あれ？」

何度も何度も、パチンパチンとやっちゃみるが、そこには赤い印がつくばかり。

マッキー「それ、スタンプ！」

若狭「くくくっ、くっそおーー！」

と、若狭、赤いスタンプたくさん付いてるサキイカの袋を齧る。

齧って、やぶってしまおう、という必死の形相。

が、しかし、サキイカの袋は、やぶれない。

若狭「ぶわあー！」

と、若狭の口元、スタンプの色がついて、真っ赤っ赤。

全員「うわあ！」

と、その若狭の形相に、ドン引き。

若狭「おんどれー！ハサミもっとなのかあー、こらあ！」

と、若い駅員を追いかける。

若い駅員、必死こいて逃げる。

こーして、2人、舞台から去る。

工藤と販売員、よろめきながら立ち上がる。

販売員「あ、だ、だいじょうぶ」

通路に散乱した商品を工藤も拾い集め、彼女を手伝う。

そうして着物バアも、そしてマッキー、カズミ、ミヤコも、拾い集めはじめる。

販売員「あ、ありがとうございます」

カズミ「あ、あのお・・・さつきから気になってたんですけどお」

販売員「はい？」

カズミ「いい、お声、していますねえ。アナウンサーみたい。ほんと、いい声」

販売員「えっ、わかりますう！あたし、縦横大学のアナウンス部なんです。いつか大きな会場で、イベントなんかの大観衆のなかで、アナウンサーやりたい、って、そう思っはいるんですけど。競争激しいんですよ、この業界。あたしなんかじゃ。それでも、あたし、この販売員のバイト、大好きなんです。だって、みんな、ニコニコ笑顔なんですよ。まあ、なかには、そうでないお客様もいらっしゃいますけど。でも、それでも、あたしの接客で笑顔になってくれたりして。すごいスピードで走ってる新幹線のなかで、窓の景色が、どんどん移り変わってゆくなかで、わたしが、みなさんを笑顔に導く、まさしく旅先案内人なんです」

マッキー「縦横大学？あたし、縦横大学社会福祉学部卒」

販売員「えっ！何年卒ですか！」

マッキー「5年前。卒業して、いまの施設に入社して、いきなりカレシにフラれたから。忘れないから」

販売員「せんぱーい！あたしもカレシいないんですうー！あたし年上が好きなんですけど、誰か紹介してくださいー！」

マッキー「いきなり？なんじゃ、それ？まあ・・・すごい年上の男たちは、いっぱい知ってるよ。職場にごろごろしてる。文字通り、いちにち中、ごろごろしてるから」

販売員「うわーっ、いいなあー！」

マッキー「よくないわ！」

で、ここに鉄道公安員ガニマタがインカム片手にデブ駅員と共になだれ込んでくる。公安、インカムに向かって叫ぶ。

公安「重大犯罪容疑の男、現在、9号車に向かって逃走中！新大阪駅にて応援要請！繰り返す、新大阪駅にて応援を要請！」

デブ駅員「ま、まさに、これは、正夢！」

公安「さあ、いくぞ！はなおかじった君！」

デブ駅員「だから、ちがいます！わたしの名前は、はなおかじった、です！」

公安「ああ、もう、いい！かじったくん、いくぞ！」

デブ駅員「あ！ぜんぜん、違う！」

と、2人、追いかけて行く、ということで舞台を去る。

工藤「あの男が、凶悪犯だったのか・・・」

オムスビ「おれは、そーだと思ってたんだ」

ミヤコ「ちがう！あのひとは、そんなことするひとじゃない！」

工藤・オムスビ「えっ！」

工藤「あの顔、ですよ」

ミヤコ「そうですよ、あんなにキリッと男らしいひとが、そんな悪いことなんて、ぜったい、できませんから！」

工藤「えっ！」

オムスビ「あんな原始のゴリラーマン」

ミヤコ、ぷい、っと、なぜか、怒りだして足早に。

ミヤコ「ちょっとタバコすってきます」

と、車両から立ち去る。

工藤「ミヤコさん・・・」

オムスビ「趣味、わりー・・・」

カズミ「そう。ミヤコ、昔っから」

マッキー「趣味わるいのよねえ。このまえも」

カズミ「フランケンシュタインみたいのと」

マッキー「しかも、全員、妻子もち」

カズミ「あたしが知ってるだけでも、三人」

マッキー「あ、あたし、五人、しってる」

工藤・オムスビ「えっ！」

カズミ「恋多き女なのよ」

マッキー「ねえ……」

着物バア「ああ、うちとおんなじ」

着物ジイ「こらっ！よけいなこと言うんじゃない！」

着物バア「あたしも、この人と駆け落ちして。で、娘も、そう」

全員「えっ！」

さきいかの恋4

着物バア「もう、どろぬま、修羅場で、よーやく離婚成立。それなのに、うれしげに、結婚式やるんですって。で、これから2人して娘の結婚式に。博多にね、ゆくのです」

販売員「はあ・・・恋のどらまちつくトレイン」

工藤「はあ？」

そにへ、ミヤコ戻ってきた。

ミヤコ「すみません。どなたかライター、貸してくれませんかね？ん？あたしの顔、なんかついてますかね？」

工藤「あっ、さっき、おれのライター」

オムスビ「あれ？どこだろ？」

カズミ「あ、ありましたよ・・・ん？の一ぱん焼肉・ぱいのぱいのぱい？」

ミヤコ「の一ぱん焼肉？」

オムスビ「今度は焼肉なのか・・・」

マッキー「・・・やっぱり。へんたいなんだ」

工藤「あ、いや！ちがう、これは、ちがう！いやあ、ちがうちがう、ちがうですよ、ミヤコさん！これはですね、あの、近所のサンちゃんがですね、あ、あの、サンちゃんは、コスゲの友達なんすけど、そのサンちゃんがですね、あんまり、おれが元気ないからって、あ、あの、み、店、つぶれちゃったから、だから、あんまり元気ないもんだからね、ほら、あの、元気づけてあげるからって、そう言って。ああ、それに、このお店は、新しくできたってのに、もう、行列ができるお店でして。もう、日曜日なんかは、もう、家族連れなんかが、こう、ずらーっ、と！」

マッキー「家族でゆくのか！」

オムスビ「うそをつけー！おまえってやつは、どこまで自分にウソをつけば気がすむんだあー！」

工藤「あっ！ちちちち、ちがうちがう！それは隣のお店でしたあー！そそそ、そのね、ととと、隣の行列ができるお店のお、その、隣の隣の、もうひとつ隣の角を曲がった路地の奥っちょに、ですね。おまえも、商売の参考にもなるし、ここは、ひとつ、勉強のため、ということもあるんだからな、と、サンちゃんが・・・」

オムスビ「で、いったんだろ」

工藤「えっ・・・ちょ、ちよつと・・・」

オムスビ「どんなサービスの焼肉屋なんだ、そこは？」

カズミ「の一ぱん・・・焼肉？」

マッキー「やらしー・・・」

オムスビ「だから、だから、どんな内容のサービスなんだ！なんで、の一ぱんで焼肉なんだあ！」

ミヤコ「楽しかったですか？」

工藤「いやいやいやいやいやいやいや、ぼくは、あんな、あんなものは・・・」

マッキー「たのしかったんだな」

ミヤコ「きもちよかったですか」

工藤「いやいやいやいやいやいや、ぼくは、やだって言ったんですよお、あんなこと！」

オムスビ「だから、いったい、なにをしたんだー！やきにくでえー！」

アナウンス「この電車は間もなく新大阪に停車いたします。This train soon will be arrive at the Shin-Oosaka station.」

カズミ「あー！ちよつと、ちよつと、見て見て！パトカーが並んでるわよ！」

マッキー「逮捕されたんだ」

オムスビ「おい！だから、いったい、どんなことしたんだ！焼肉屋で！」

着物バア「ねえ、そんな、悪いことするような人には見えなかったけどねえ」

マッキー「はあ？」

ミヤコ「そうですね！」

オムスビ「気になるじゃないか！いったい、なにをしたんだ！」

カズミ「ですよねえ。どんな・・・」

着物ジイ「するどい殺気がみなぎっていたな。あれは尋常ではない」

オムスビ「だから、そーじゃなくて！」

アナウンス「新大阪、新大阪に到着いたしました。

Arrived at Shin-Oosaka」

工藤「あっ！あの人、捕まった。連行されてる」

カズミ「あ、忘れ物、忘れ物よおー、バック、バック、これ！」

ミヤコ「さようならー」

と、ここに、また何人かの乗客が登場。

外国人ふうな女が5～10人は、欲しいかな？

ダンサーです。

で、こいつらをマネジメントしてるスーツ姿のおっさん1人。

なんだか、ワイワイ、がやがやと入ってくる。

スーツ「ああ、みんな、静かにしなさいよー。まいったなあ、もう、観光気分なんだもんなあ。

あ、どうも、すいません、静かにさせますから」

マッキー「あんたは、なんか勉強してんでしょ？向こうで勉強してなさいよ」

オムスビ「勉強ではない！仕事なんだ！福岡のクライアントのプレゼン資料が、まったく出来

上がってないんだー！しかも、それは、あと数時間後に、おれがやらなきゃいけないことなんだよおーー！」

ミヤコ「もっと早くやっておけばよかったんじゃないんですか？」

オムスビ「おれだってなあ、毎日毎日忙しいんだ！クライアントの接待だってあるし、毎晩毎晩もう、大変なんだ！くそお、寝坊しちゃったんだ今日」

マッキー「飛行機でいけばよかったじゃん。新幹線より速いんじゃない？」

オムスビ「このJR海南も、うちの大切なクライアントのひとつなんだ！国内の航空会社とは犬猿の間柄なんだぞ、そんな、このおれが飛行機なんかに乗っちゃったことが、もしもバレたら、大変なことになってしまうんだあー！」

カズミ「まあ、とにかく、仕事しててください」

オムスビ「だから、気になるじゃないか！いったい、なにが起こったんだよおー、焼肉屋で！こんな状態では、とてもセールス・プロモーションの企画書なんて、できやしないよお！」

スーツ「ん？失礼、なんのSPですか？」

オムスビ「ん？ま、まあ・・・あんにゃ、関係ないよ」

スーツ「ふーん・・・東京から新幹線に乗ってる広告屋さんかあ。どうせ、どっかの過疎の地方なんかの観光誘致とか、町おこしとか、地方納税だとか、そんなやつでしょ？」

オムスビ「えっ？」

スーツ「B to Cのビジネスは、うまくいっていない。リテールを理解できていないから。だから、いまも不況なんだって。でも自治体は、もっともっともっと理解していない。それが現状だね・・・ひよっとして通電さんですか？やめときなさいよ。地域名産のランディング・ページなんか作っちゃって、ヤプーに丸投げ5千万なんてことはね。ありゃ、詐欺だわ」

オムスビ「えっ！？あ、あなたは？」

スーツ「あたし、フリーですよ。コンサル。はい、どうぞ」

と、スーツ、名刺を渡す。

オムスビ「コンサル！」

スーツ「いやいやいやいや、おはずかしい話ですけど、お客様のため、ユーザのために、やっています。あたしのは、安いから。500万くらいで、やっちゃうから。おかげさまでね、ひっぱりだこですわ。そちらとはゼロっこ違うから。あっはっはっ」

オムスビ「いっ、いったい、なにをやるんですか！」

スーツ「そうなんだよねえ。公共事業は、民間企業に競争力で劣るんだよね。民営化とは言っても結局、なんにも変わらない郵便局、だから、みんな便利な宅急便会社を使ってる。銀行とか国金がかね貸してくれないから、みんなサラ金とかクレジット会社使う。学校が役立たずだから塾にゆく。国保じゃ安心できないからガン保険に入る、みたいな。就職、転職ならハローワークなんて使わないで、みんな人材派遣をみんな使ってるでしょ？将来、日本の社会から区役所がなくなりますよ。区役所だけじゃない。銀行もなくなる。郵便局もハローワークも、学校も託児所も、本屋もなくなってね、手数料取ってそれらの受付やら代行サービス、あるいは業務そのものを全部、24時間営業のコンビニがやるようになる。単純作業は、すべてAIがやる時代がくる、なんてホーキングは預言したけど、AIを導入する資金が、日本企業にはない。結局、AIはチェスと将棋に勝っただけで、弁当にエビを乗っけたり、ベルトコンベアーから流れてくる仕分けだったり、居酒屋やカラオケでジュースやビールを注いだり、そんな極めて単純な作業ですら、人がやっている。恋愛関係に絶望してしまった人たちの間でAIロボットと結婚する人は増えるけれど、単純労働は永久に人の手に委ねられる。みんな子どもつくらない、つくれない環境なんだから当然、日本人は激減する。外国人を大勢いれなきゃ国としての経済活動を死守できない。なので、外国人だらけの国になる。オフィスも居酒屋もコンビニも、外国人労働者たちであふれかえる。そんな社会の到来を見据えて、民間企業も公共事業も、今やらなければならないことを、やらなければならない。それをやっとかないと、近い将来、消滅するだけよ」

オムスビ「そそそ、それで、ど、どんな、プロモーションが必要なのですか？！あなたは、どんなことを、やられていらっしゃるんですか、ぐ、具体的には？」

スーツ「あたしがやることはカンタンなことしかできませんよ。Webとアナログの融合と。それをツイッターなんかであおってね。ロングテールの線路上にある小さなマーケットのみがターゲット。つまりオタクのグループのみ。ニッチな市場に魅力あるテーマを提供すること。ディープに、ダイレクトに、強烈なインパクトを！登山マニア、釣りマニア、競馬マニア、マンガ・オタク、ロリコンおじさんたち、とかね。ドストライクですよ。こっちが投げた球は、確実にカーキーンと跳ね返ってくるからね」

オムスビ「で！で、ぐ、具体的に、どどど、どんな！あつ、か、書いて、いいですか？書いても？」

スーツ「うん。いいですよ。書いて書いて」

と、オムスビ、猛然とパソコンに向かって打ち込む。

スーツ「WebとかITとかインターネットなんて言ったところでね、使ってるのは所詮、人間なんです。人間の原始の欲求は、そんなもので満たされることは決してないわけです。言葉のない時代から、人間たちは集まり、火をともし、踊っていたのです。わたしたちはマニアな小集団のなかに火を灯すのです。そう、実にカンタンなイベントです。お祭りです。でも、せっかく全国からラーメンマニアを集めても、イベントのまわりがスパゲティ屋しかないようじゃ、どーしよーもないでしょ？そんなんじゃ、みんなお金、おとしてくれない。なのでイベントだけじゃダメなんだ。小田原かどっかの山奥で等身大のエヴァつくったでしょ？あれ、あまりにも大量なファンが集まりすぎちゃって、まわせなくなっちゃって中止ですよ。つまり、そーいうイベントってのはね、駅から会場までの導線から、そう、まさしく町全体に渡っての大規模かつ大胆な企画が必要なんです。それも一回こっきりの企画、そして新しい続編を作り続けること。継続することで初めて町は再生のチカラを得られるから。そうしないと絶対に成功しない。クライアント・サティスファクションの徹底ディテール追求。絶対的に、がっかりはさせない！さあ、あれを見なさい。窓の外に見える、あの荒れ放題の貧相な丘を！あそこに町の人々が手作りの会場をつくる。紫のネオン・ライトで飾り付ける。オールナイト、椎名林檎のライブ・コンサート！そんなこと、やってみな、何千人の客が集まると思っているんですか！三代目のオールナイト・コンサート、そんなんやってみなさい、全国つつうらうらから、もう若い、うすっぺらなあほ女たちが、わんさか集まってくる！そあ、想像してみなさい。その光景を、その雰囲気。たくさんさんの蛍が中空に舞い踊る夜に、その音楽のなかにいる自分自身を！」

販売員「ステキー！いくいくいくいく、ぜったい、いく——————！」

スーツ「そして、さらに必須の実行、コンセプト！それはto be continuedですよ。つづく、ですよ！そんなことを500万円で企画提案しちゃうんだよー、安いでしょう！」

オムスビ「それは安い！安すぎる！」

スーツ「そう、最初に説明した通り。いかなるイベントも、歌と踊りは必須。さかなさかなさかなと歌えば、さかなが食べたくなる！やきとんとんやきとんとんと歌えば、やきとんが、食べたくなる！歌と踊りは、人間の原始の感情を刺激する！たとえば、こんなふうに！」

と、もう、女たちは着替えて登場。

若い駅員「乗車券を・・・」

ばっ、とポーズを決めて、オンナたち踊り出す。

観客席に飛び出して踊りまくろうべいべー！

※ うーん、ここは音響、音楽、照明が要るな。

※踊りの後、この場面のみ登場する、知り合いのロシア女性3名、いれようかな・・・。

2曲、うつくしいロシアの歌。

1曲、観客と踊る計3曲。

これは、いいなあ、ぜったい、みんな感動するよー。

若い駅員「うわあ・・・」

販売員「すてき・・・」

踊り子「ちょっと、ニーナちゃん、具合悪いみたいよ」

スーツ「だから、無理しなくていい、って言ったのに」

ニーナ「いや、病気じゃないから。みんな頑張ってるんだから、あたしも、みんなの手伝いしない」と

着物バア「あら、どうなさったの？」

ニーナ「妊娠してるんですよ。運転手の田部井のバカが、手出しやがって。安月給のくせに、国際結婚だって」

着物バア「あら、すてきじゃない」

カズミ「ねえ、いいじゃない。お金なんて」

スーツ「いやあ・・・国際結婚ですよ。家族で故郷に帰るんだって飛行機代、子ども育てるのも養育費、学費・・・金かかるもの。うちで運転手やってたって、いくらにもなんないもん」

ミヤコ「いや！愛があれば！それだけで、いいんです！」

販売員「そうです！・・・あれ、あたし。仕事しなきゃ」と、急いで去る。

工藤「愛・・・か」

アナウンス「いつもご利用、ありがとうございます。この電車は、のぞみ10号、博多行きです。間もなく新神戸に到着いたします。

This train soon will be arrive at Shin-koube station.」

そうして青森弁スーツ男3人、乗ってくる。

1人は中年の課長、2人は若手。

課長「ちゃちゃちゃあー！」

若手a「なんだい前の車両、おら、ぶったまげた」

若手b「おらもだあ。ウワサじゃ聞いてたけんどもよ、やぱり外国人は、みんな裸で歩いているんだ」

若手a「さそってるんでねえか、おらたちを」

課長「ちゃちゃちゃあー！」

若手a「おら、もいっぺん、いってみるだ！」

課長「あほ！おんな、めっけにきたわけでねえんだぞ、おらたちは」

と、席に着く。

周囲のみんなも我にかえったかのように、そうして、みんな座席につく。

踊り子たちは前の車両にいる、という設定なので、舞台上にはいない。

と、そこに若狭、再登場。

工藤たち、びっくり。

若狭、ぶるぶる震えながら、マッキーの斜め前に座る。

カズミ「なんで!？」

若狭「さむい」

工藤「えっ!？」

若狭「新幹線にしがみついて。逃げてきた・・・」

マッキー「えええーっ！とりあえず、あんた、こっち、奥に座んな。これ、かぶって」と、そのへんに、かかったコートかなんかを、若狭の頭から、かぶせる。

オムスビ「おい、ちょっと待て！警察から逃げてきたんだぞ！かくまうと、おれたちもまずいんじゃないのか！」

課長「ぢゃぢゃぢゃあああーっ！」

スーツ「警察から逃げてきたの？そいつ？まずいよ、それは。そいつは公務執行妨害だろ、事情を知ってる我々全員は犯人隠匿、逃亡幫助の罪に問われる」

工藤「そ、そんなこと、言われたって」

ミヤコ「そうですよ！ひとを見た目だけで判断してはいけません！このひとが、いったい、なにをしたって言うんです！」

若狭「警官、7人くらい、ぶんなぐってきた」

課長「ぢゃぢゃぢゃあああーっ！」

スーツ「あちゃあー！あうとですよ、あうと！暴行傷害罪だよ、あんた！」

工藤「あいやあーっっっっ」

若手a「やっぱ、都会っちゃあ、すんげえとこだべなあ。毎日、こげな、めんこいオナゴたちが、わんさと裸でいたり、毎日、こげな大事件がおこりよる」

若手b「んだなあ。おらさところは、ただ陽がのぼって暮れてただけだあ」

スーツ「あんた、自主しなさい。自主すれば罪も軽くなる」

若手b「あれー、どっかで・・・」

オムスビ「そうだ！あんたが、ここにいたら、みんなが迷惑する！おれは大事な日なんだ、大事

なプレゼンがあるんだ！警察の事情聴取なんかに協力する時間なんか、ぜんぜんない！」

若狭「わしにとっても、今日は、どうしても・・・大事な日なんじゃ。どないしても、わしは、今日、博多に・・・20年、やり続けてきたんや。20年。今日、博多で、最後の日なんじゃ。それが終わったら、警察でも、どこへでもいきますわ。それさえ終わったら、わしは、もう、死んでもええんやから」

若手b「あっ！」

全員「…………。」

そこに若い駅員が現れて、腰ぬかして驚く。

若い駅員「はう！あうあうあ—————！」

這うように逃げ出そうとする若い駅員を、工藤は捕まえる。

工藤「まってくれ。たのむ！あの人のことは内緒にしてくれ！たのむ！」

若い駅員「えっ！」

工藤「自主させるから、だから」

若い駅員は、ただ黙って逃げるように去ってゆく。

全員「…………。」

カズミ「おなかすきましたね。まあまあ、とりあえず、なんか食べてから考えましょう。ああ、サキイカ、これ・・・なんで、開かないのかな、これ」

若手a「あー！それ！」

課長「ま、待て」

カズミ「えっ？」

課長「いやいやいやいや…………」

と、課長、若手2人と内緒話し。

課長「おい、おめえら、これは、いい機会だぞ！一般消費者たちが、どんな反応をするのか、見極めるチャンスだべ！」

若手2人「ああ！」

スーツ「そんな、サキイカの袋なんか・・・ん、あ、あれ？あ、あかない。なんで？不良品なんじゃないの？」

課長「不良品・・・」

マッキー「とにかく、事情、話してみなさいよ」

若狭「はあ・・・」

若手b「あのお・・・」

課長「おめえは、よぶんなこと言うんでねえ！」

若手b「あ、んでねく」

若手a「えーから、黙っとけ」

アナウンス「この電車は、間もなく、桃タロウ伝説発祥の地とだけしか有名ではない岡山に到着いたします。

Soon will be arrive at Okayama. I hope you will have good luck!

ミヤコ「あっ、ヘリコプター！ああ、あっちからも！警察だ！」

カズミ「ほら、見て見て！向こうの高速道路！パトカーいっぱい走ってるわよ！ほらほら！」

工藤「あいつ、通報したんだ！」

スーツ「あたりまえだろ！駅員なんだから」

マッキー「どんな事情があるのかわかんないんだけどさ。こりゃ、アウトだわね。福岡行きは、あきらめなさい」

若狭「あああ、うううう……」

オムスビ「あ、いかん！はやく資料まとめないと！そいつのことは、おまえの責任だからな！おまえが、なんとかしろ！次の駅で警官が乗り込んでくるぞ！おれは、しらん！見なかった、気づかなかった、まったく、聞こえなかった！」

スーツ「そう。あたしも知りませんよ」

工藤「えっ！」

着物バア「はくじょうねえー」

ミヤコ「そんなんじゃ、もてないわよ、女の子に」

スーツ「そんなこと言ったって」

着物ジイ「ふん！どいつもこいつも」

岡山から警棒片手にガニマタと花岡が、息せききって勢いよく乗り込んでくる。彼らの後に続くように、あのかよわい若い駅掌、そしてネズミ色のジャンバーを着た、小柄な老人がたそがれ感漂わせて乗ってくる。

若狭、コートをかぶってマッキーの隣の窓際に隠れてる。

ガニマタ「例の凶悪犯はどこにいるんだ！」

若い車掌「えー、あっ、そこです！そこに隠れてます！」

ガニマタ「ちょっと、どきなさい」

と、マッキーを引っ張り出し、窓際でコートを被っていた若狭を捕らえる。

ガニマタ「傷害、公務執行妨害で緊急逮捕する！」

若狭「かんにんや！かんにんや！後生や！必ず自首しますやさかい、どうか福岡に！一生のお願い

いや！」

ガニマタ「きさま、この法治国家ニッポンで、警官殴って逃げられると思ってんのか！事情は署でゆっくり聞かせてもらう。さあ、立て！」

若狭、泣きながらガニマタと花岡に抱えられるようにして立ち上がる。

若狭「人生、懸けてますねん・・・お願いや」

花岡「結構な余罪、ありそうだなあ、おめえ。この凶悪犯があ！」

若いスーツb「いやあ！違う違う！こいつはな、ニシナリの種馬、ホッピー若狭！人生のすべてをキックボクシングに捧げて、今夜、福岡ドームで引退試合！」

全員「えっ！」

スーツ課長「なんで、おめえ、そんだだごと知ってんだ？」

若いスーツb「先々月の日曜日の夜、テレビの常夏大陸で観ただ！孤児院で育って、親も家族もねぐ、貧乏な毎日を、皿洗いの仕事を続けながら、たった、ひとり、キックボクシングに夢をかけて、それだけをささえに、これまで生きてきて。おら、感動しちまって、涙が止まらなかっただ！今日はこの人の、人生最期の日だ！」

スーツ「あっ、そういえば・・・ホッピー若狭。そんな名前、書いてあったな。進行表に・・・」

ガニマタ「引退試合！それは、ほんとなのか！」

若狭「ううう・・・すべてを懸けてきたんや・・・ほんとに、すべて・・・」

着物ジイ「ちょっと、待ってやるわけには、いかないかな、ガニマタくん」

ガニマタ「えっ？ああ！こ、これは、権俵ジユウベエ先生！」

着物ジイ「全国剣道練成大会の決勝戦、わたしが主審を勤めた君の引退試合。あの闘いぶりは、いまだに、わたしの心のなかに輝いているよ」

ガニマタ「うっ・・・先生・・・」

花岡「そんだごと無理だべ！他県からも緊急出動要請ししまったんだがら！スワットまできちまって、もう岡山駅は警官でいっぱい！TV局まで集まっちゃってぎでまず！どないすんだべがあ、これわ！」

ガニマタ「うううー・・・」

工藤「あ、おまえだ！おまえがいけないんだ！黙っててくれって、あんなに頼んだのに！」と、工藤、若い車掌を指差す。

若い車掌「そんなことはダメです！ひとには、みんな、いろんな事情があるとは思いますが。だけど、ぼくは他のお客さんに迷惑をかける人は許さない。ぼくだって、この車両に乗って仕事をするのは、子どものときからの夢だったんだ。みんなのステキな一日を乗せて走っている夢の電車なんだ。どんなことがあったとしても、ぼくはこの電車を守る」

スーツ「そりゃ、そうだ」

工藤「うー・・・」

花岡「どないすんだべかあ！」

ガニマタ「ううう・・・」

ネズミ老人「あのう・・・わたしを捕まえてください。無賃乗車です」

花岡「えっ？」

ネズミ老人「三県またいで無賃乗車した年よりは、特別な老人刑務所に入れてもらえると聞きました。わたしを、そこに入れてください。ずっとカメラマンやってたんですけど、仕事がもうなくなっちゃいました。老人ホームに入るお金もないので」

ガニマタ「なんと」

ネズミ「お願いします」

オムスビ「ちょっと待った。無賃乗車ではない。乗車券は、おれが払う」

全員「えっ？」

オムスビ「じいさん、いったい、どんな写真、撮ってたんだ？カタログとか、そういの？ぶつ
撮り？」

ネズミ「あ、はい。その通りです」

オムスビ「うちの通販サイトでカメラマンが足りない。うちで働きなさい。給料は安いけど。そ
んなことくらいで、やけっぱちになるなよ」

さきいかの恋5

マッキー「おー！おむすびー！」

カズミ「かっこいい！」

なぜか、カズミは、ずっと、例のサキイカを握りしめてる。

工藤「おまえ、はじめて、いいこと言った！」

隣の車両から踊り子ひとり走ってくる。

女「社長！ニーナちゃんが！！あかちゃんがうまれる、あかちゃんが！」

スーツ「だから無理すんじゃないって、あれほど言ったのに！」

着物バア「妊娠、出産を軽くみてはいけません！命をおとすことだってあるんですよ！」

ガニマタ「赤ちゃんだと！よし、すぐに連れ出せ！緊急救命だ！これで、なんとかなるだらおー！」

花岡「えっ、こいつは？」

ガニマタ「武士の情けだ！試合が終わったら必ず出頭するように。いいな？さあ、急げ！はなおかじったくん！」

花岡「あ、また！ちがいます、わだじは、はなおか・ぢったです！」

ガニマタ、花岡、踊り子たち数名と共に、妊婦を抱えるようにして走り去る。

そして、また電車は走り出す。

若い車掌「おおお、おとりこみ中、申し訳ございません。じよじよ、乗車券を、拝見させていただきますうー」

若狭「あっ、てめえ！」

工藤「おまえ、ちくつただろ！あんなに、頼んだのに！ちくつただな、おまえ！どうなんだよ！」

若い車掌「あ、あ、はい！」

若狭「なんだと、こらあ！男の夢がなあ、男の夢がなあ、わかんねえのか、てめえはよお！男として、最低だあ、てめえー！」

若い車掌「きききき、規則なんです。きききき、規則ですから！ぼぼぼぼ、ぼくは、しゃしゃ、車内でトラブルを起こす人を、見逃すことはできません！」

スーツ「そりゃ、そうだ。ここは近代国家なんだ。規則、第一！」

若狭「規則だとお、こらあー！なーにが規則だ、こらあ！規則、規則、規則！てめえらにはなあ、規則だけで生きてんか、ぼけ！心、つてもんが、ないんかこらあ！」

若い車掌「ききき、規則だけではありません！ぼぼぼ、ぼくは、この、新幹線に乗って働くことが、ずっとずっと、子どものときからの夢だったんです！」

全員「・・・。」

若い車掌「ぼぼぼくは、新幹線が大好きなんです！この新幹線のなかで、みんなに迷惑をかける人を、ぼくは、ぼくは、絶対、許さない！」

若狭「そうか・・・」

工藤「それは、わるいのは、おれたちだ」

若狭「すまんかった・・・わしは、あほじゃ」

マッキー「まあまあ。試合だろ。元気だせよ」

女子販売員「毎度ありがとうございます！岡山名物ももたろうダンゴ、ももたろうチョコレート、ももたろうチーカマ、お子様が飛んで喜ぶももたろうパン！あんぱんまんもびつくり、ももぱんでちゅうー！」

若狭「もし、試合に勝ったら、マッキーはん、わしとつきおうてくれい！」

マッキー「えっ！うーん、一回だけデートしてあげる」

若狭「ほんまか！うおおおおおー、勇氣、りんりん！」

女子販売員「うわ、うわ！恋の花咲く夢のトレイン！」

若い車掌「そうなんです！みんなの思いが叶うんです！ここは、夢のトレインなんですよお！」

カズミ「いや、そんなことはありません！」

全員「えっ！」

カズミ「わたしにはカレシがいませーん！もう、ずっとずっと、ずーずーと、いませーん！えーえーん！」

全員「……。」

カズミ「しかも、これ、あかないのー、なんでー、これー？なーんだか、くやしーいーいーいーいーいーいー」

と、例のサキイカの袋を、みんなに見せる。

女子販売員「それは……うちで扱ってる商品ではありませんねえ」

スーツ「だから、不良品なんじゃないの？あかないサキイカなんか、ありえないでしょ？だいたい、どこのメーカーが作ってんのこれ？有限会社いか大王？なんだ、これ？聞いたことない会社じゃないの。あは、青森県？ちっちゃいなかの会社の粗悪品だろ」

課長「わが社は、粗悪品など、作ったことはない！」

スーツ「えっ」

課長「これはウチの社運をかけた一大商品だあ！かるべーがなんだ、皇族のニッホンがなんだあ！おめえたちも知ってるべ。あの上野動物園で白蛇が逃げ出し、行方不明になったどぎだ。ニッポン全国、誰一人だ、誰一人とも見つけられなかったつつーのに、唯一、ただ、ひとり、おらが村のいたこがめつけただよ！預言で、上野の白蛇をめつけただ！これは全国ニュースで報道された事実だべや！」

工藤「あ、それ、聞いたことある」

課長「んだべんだべ、おまえさ見たべ、あのニュース！つまり、おらが言いたいのはだ、青森県をばかにすんでねえ！」

スーツb「ああ、そうだとおさあ！バカにすんでねえ！」

スーツa「や、青森なんか、くそだ。なーんも、ねえとこだ。なーんもねえ。だだっぴろいとこに、ただ、風がふいてるだけだ」

課長「そんだだごとはねえ！ほやがいつぺえあんどお！獲れたてのほやほやだあ！」

スーツb「キリストの墓だつてあんだ！」

スーツ「それ、青森だっけ？」

課長「青森上空で二匹の竜が戦ったり、その空をテポドンが飛んでったり、海からは原子力船ムツが現れたり、大地には地獄河原が煙をあげてたり、そんだだ由緒正しいミステリーランド青森県に生まれたわが有限会社いか大王は、今年創業100年、まさしく、いか一筋！そして、このたび、その100年に渡り培った当社独自の技術を結集して完成したのが、こちらのイカ100なのだす！当社は、この新商品で、全国販売を開始！デフレ厳しいこの時代に、ビジネスチャンスを拓く所存にございますだで、不良品などとは、言語道断！聞き捨てならぬことにございますだべした！」

カズミ「ああ、それで・・・」

ミヤコ「いか100」

スーツb「これは、そんじよそこらのサキイカではねえ」

スーツa「100年もつんだ」

全員「えっ？」

着物バア「100年間、腐らない、ということですか？」

課長「その通りです。このご時世、なにが起こるかわがりません。大地震、大災害、テポドンだ

って、いつ落ちてくるかわがらない、そんなずだいなのですよ。だからこそ、100年保存できる食品は、家庭にひとつ、必須の危機管理対策となるのだす」

スーツb「大地震でもこわれぬ。像が踏んでもこわれぬ」

課長「ふふふふ・・・その通り。最先端技術の結晶、この袋はチタン合金でできている。つまりテポドンが当たってもこわれぬ。しかも100年安心」

工藤「そんな袋、どうやって、あけるの？」

課長「その裏面をごらんください。こと、細かく、あけかたが書いてございますだ」

カズミ「なに、これ・・・なんか損害保険とか生命保険の契約書の裏側みたいな。あんまり文字が小さくて読めぬ」

スーツa「くわしく書かなぎやなんねえがら、そないになつまつただ」

スーツ「あのさあ。誰も読まぬから、サキイカの袋の注意書きなんて」

カズミ「なんでもいいから、で、これ、どうやってあけるの？」

課長「それは、まさに常識を覆す方法なのだべす」

マッキー「なんか、へんな東北ベンだな。越後に直してもらおう」

課長「こーやって、こーやって、ぽん！」

全員「おお！」

若狭「ここ、これは・・・あんなにチカラをこめたのに・・・」

課長「チカラなど、いっさい、必要ねえ。やり方を変える。そこに新しい道がひらかれるんだべ」

若狭「やり方、変える・・・そうか・・・」

マッキー「ん？どした？」

若狭「そうだ・・・いっそ、変えてみるか。やり方・・・逆に」

ミヤコ「あー、なんだか、もやもやしていた感じが、すっきりしちゃった。今回、思いつきの旅行だったんだけど、新しい自分が見つかるような、そんな気がする」

オムスビ「でも、これは・・・売れないんじゃないか？」

課長「説明せねばなんねえ。説明すれば売れる！なので、我ら三人、社命を懸けて、全国の量販店様にPRすべく、こーして新幹線さ乗って、あつつこつつ、いっでるわけですだ」

スーツ「キャンペーン、やないとね」

課長「キャンペーン？」

スーツb「きゃんですばーげん？」

スーツa「古・・・」

工藤「せっかくだから、みんなで食べてみましょうよ。ささ、どうぞ、どうぞ」

カズミ「あ、うまーい」

マッキー「うん、美味しい！」

着物ジイ「おや、いつの間にか広島を通過してしまったようだ。ああ、近づいてきたな。なんだか緊張してきた。おじょうさん、そこの酒をくれ」

女子販売員「あ、はい。あ、のんびりしてしまったわ。急がなきゃ」

若手車掌「ああ、ぼ、ぼくも。いかなきゃ！」

着物バア「あたしにも一杯ちょうだい。うん、おいしい。あなたが、あんなにステキな励ましの言葉をかけるなんて。初めて聞いた」

着物ジイ「ん？なんのことだ」

着物バア「いつも、あなたは、誰に対しても、きびしい言葉ばかり。自分の娘にも。ほんとは

、そうじゃないくせに」

着物ジイ「……………」

着物バア「なんて言ってあげるために、わたしたちはゆくの」

着物ジイ「……………」

車内アナウンス「Soon will be arrive at Ogura station.この電車は、間もなく小倉に停まります」

工藤「おれも緊張してきちゃった」

若狭「あんたひとりやない。わしも決戦や！勇気だせい！」

カズミ「そうよ、がんばって！」

オムスビ「おれだって大変なプレゼンなんだ。みんな一緒だ」

工藤「そうだよな。みんな、がんばってんだ。先生、おれたちも、がんばらなきゃ、ね！」

着物ジイ「うーん……………」

ここで舞台暗転。

喫茶店に変わる。

ネズミ男は衣装チェンジ、喫茶店のマスター役。

ミヤコも工藤の妻の役に変身。

喫茶店の奥の椅子に座って、新聞を見てるマスター。

舞台から向かって手前右の席に座る工藤の妻・恵子。

彼女の頭上にTVがある。

そんな妻の正面に座っている工藤。

工藤「や…………やあ、元気にしてたか」

工藤は、どうにか、

そんな言葉を口にすることができた。

暗い目をしながらも恵子は、小さく笑いながら頷いた。

しばらく2人は黙ったまま、

工藤は、また深い溜め息を付いた。

工藤「お父さんたちとか、みんな、もう家で待ってるのかな？」

恵子「まだ。おかあさんだけ。おとうさんは、ちょっと遅くなるって」

工藤「お、おにいさん、は・・・？」

恵子「おにいちゃんは夕方。ホームセンターに寄って金属バット買ってくる、って」

工藤「金属バット！ や、野球でもやるのかな・・・」

恵子「絶対、殺す、って。あんたのこと」

工藤「え・・・う、うーん、うーん・・・」

向こうのカウンターの上には
テレビが掲げられていて、
マスターは競馬中継を見ていた。

カウンターには競馬新聞が、
広げられたまま置かれていた。

TV音声「2番、本命のタイタニック・クイーン、このまま逃げ切るか！
さあ、どうだ、どうだ！！」

工藤、こんな喫茶店に入るんじゃなかったなあと思う。

2人は、競馬中継の音のなかで、
しばらく向かい合ったまま
押し黙ってしまっていた。

工藤は煙草を取り出して、火を点けた。
ニコチンが体中にまわって、
クラクラするような感覚に襲われた。

恵子「あなたは、どうしたいの？」

恵子がそう言った。

工藤は煙草の白い煙を吐きながら言った。

工藤「お、おまえは・・・ど、どうなんだよ」

TV「おっと6番のラーメン・ダイスキーが追いついてきたぞっ！
タイタニック・クイーン、抜かれるか！」

工藤は所在なげに鼻の下の辺りを擦ると、
右手に握りっ放しだったライターを
テーブルの上に置いた。
そして、また訊ねた。

工藤「ま、ま、また、さ、い、いっ、一緒に頑張ってみない。かなあ・・・
なんて、はははは」

恵子は少し俯いたまま、黙り込んでいる。
恵子は、そのテーブルの上に置かれた
緑色のあのライターを見詰めていた。

恵子「自信、ないわ」

恵子は緑色のライターを見詰めながら、
ポツリとそう言った。

TV「おっと、タイタニック・クイーン、抜かれた！
抜かれた！やったぞラーメン・ダイスキー！
このままいけば初優勝！！」

マスター「いけえ！コラあー
イゲエー——————！！」
と、雄叫びを上げた。

思わず、びっくりして工藤は立ち上がったが、
また再び座り直して、工藤は背中を反らすようにして
天井に目を向けると
工藤「うーん」と大きな溜め息をついた。
工藤は恵子の顔を真正面から、
しっかりと見ることができなくて、
立ち昇って行く紫色をした煙草の煙を、
ただ見詰めることしかできずにいた。

工藤「う、うーん、うーん・・・」

恵子「・・・・・・・・。」

恵子はテーブルの上に置かれたままの
緑色のライターを、力なく見詰めている。

工藤「お、オレ、やっぱり、また店やろうと思ってんだ」

恵子「お店？もうお店たたんだって・・・・・・・・」

工藤「あ、ああ、今の店はね」

恵子「今の店って・・・・・・・・？またお店出す気なの？」

工藤「う、うーん、実は、そのつもり」

恵子「お金はどうするの」

工藤「あ、ああー、う、うーん、い、いや、借金のことは、
後でおとうさんたちにも話すんだけど、
たしかに、かなり残っちゃってるんだけど。
でも、ななな、なんとか払っていけると思うんだよね」

恵子「昨夜電話で話した通りだから。
そんなだから、みんな怒ると思うけど」

工藤「うう、う・・・・・・・・うーん・・・・・・・・うーん・・・・・・・・」

TV「ああっ！ラーメン・ダイスキー、こけたあ！
こけてしまいましたあ！！」

工藤は渋い顔をしながら、
チラリと向こうの方にあるテレビ画面を見る。
マスターが、ガックリと両肩を落とした様が見えた。

工藤は再び、大きな溜め息を付いた。
渋い顔をしながら、俯き、
口の周りを左手で摩る。

工藤「お、オレも、も、もも、もう42歳だ。
就職たってさ、
居酒屋とかで働いたって、
給料なんかさあ、そんな借金返すなんて無理じゃん。
だけど店をやれば、
客さえ入ればなんとかなるじゃない？」

すると恵子は顔をポツリと言った。

恵子「お客さんが来てくれれば・・・ね」

工藤「い、いや、だから、今までは・・・・・・・・。
オレもどっかで意地張ってたのが、
いけなかったんじゃないかって思うんだよね。
オレさ、じ、実はさ、今日は色々なことがあってさ、
色々な事を考えたんだよ」

恵子「ほんとに殺されるから。おにいちゃんに」

工藤「そ、そそそそ、そうだよなあ、やっぱなあ、うーん・・・・・・・・」

あのコワイおにいさんが怒っている、という演技よろしく。
恵子は緑色のライターを見詰めながら言った。

恵子「もう、別れようか・・・私たち」

TV「おーっと！タイタニック・クイーンもこけたあ！！
うわっ、みんなを巻き込んで、みなコケてしまったあ！！
大変だア、これは大変だア！！」

マスター「だばはああああ————・・・・・・・・うわああああああ」と、
マスターの、すさまじい溜め息が聞こえる。
マスターは、まさに
ガックリと両肩を落としてしまっていた。

工藤は、また新しい煙草を口に銜えたが、
その顔も、もはや泣き出しそうな表情である。

競馬中継が終わった。

恵子「そろそろ、行こうよ。
もう、みんな集ってくる頃だから」

工藤は大きな溜め息を付いた。
もう、ほんとにダメだ、こりゃ。
やっぱ、もう・・・。
という演技力よろしく。

そうして工藤、なんとか気力をふりしぼってマスターを呼ぼうとした時、テレビからキック・ボクシングの中継が流れてきた。

TVアナウンサー「この体育館は、福岡市が民間と協力して設立されたというもので、町おこしの一貫として作られたこの福岡レインボー・ドームから今夜は生中継でお送り致します。

本日の第1試合は、なんと、ニシナリの種馬・ホッピー若狭対、フランスの貴公子・カルロス黒ラベルとの対戦ですが、ここでの注目ポイントは？やはりホッピー若狭が、どこまで善戦できるかという、そういうことになりそうですよね」

TV解説者「若狭にとって厳しい試合になりますね」

TVアナウンサー「う～ん、ホッピー若狭！華麗なる天才カルロスを相手に、何度倒されても起き上がることが出来るのか！ホッピー若狭としては、まさしく、福岡市の町おこしのおきあがりこぼし的なファイトができるか！派手なKOシーンに注目です！」

工藤「い、いや・・・ちょ、ちょっと、もう、ちょっと待って」
と工藤は再び椅子に座りなおしてしまった。
恵子は、まったくTVは見ない、関心なし、耳に入ってない。
ずっと、ぼんやりとライターを見詰めてる。

テレビでは解説者とアナウンサーが話しを続けている。

TV解説者「ですね。若狭も、もう45ですから。ちょっと第一線で闘うには無理ですねえ。いや、実は若狭は、この試合で引退なんです。それだけに、かなり気合は入ってますよね。私は若狭についてはデビュー当初から見ているから。私自身、若狭の大ファンなんですよ」

アナウンサー「はい、私もホッピー若狭は、よく知ってますよ！あの、前へ、前へと出て行くブルファイト、倒され方はいつも実に爽快だあ！あのケレン味のない豪快なブツ倒れ方！いつ見ても気持ちがスカッとしますね！」

解説者は、ちょっと困ったように唸り声を漏らした。

解説者「う〜ん、まあ、これはプロレスじゃないんでね。
でも、まあ、たしかに、あれですよ、
その、残念なことに勝ち星がなかったんですけどね。
彼は苦労人なんですよ。
孤児院で育ちましてね、
昼間は、ずっと工事現場でバイト生活をしてましてね、
そうして夜、練習をして
プロのリングに上がり続けてますからね」

さきいかの恋 完

アナウンサー「そうですね！倒れかたは、いつも前のめり、リング上、永遠のさすらい人！リング上の行き倒れ人だあ！！」

恵子「ここにたって、しょうがないよ。行こう」と、恵子は言った。

工藤「う～ん・・・」

テレビのボリュームが小さいので、注意していないと何も聞こえない。工藤は恵子の質問に答えながらも、テレビが気になって仕方がない。

アナウンサー「さあ、いま、まさに試合開始のゴングが鳴ったぞ！ああ、もう、いきなりKOされるかと思いましたが！なんとか、もちこたえぞ！」

解説者「うーん、若狭らしくないステップ・ワークですね！ここで打ち合いを避けるとは！いつもと戦術を大胆に変えてきましたね！」

アナウンサー「リング上で追いかけるカルロス、逃げ回る若狭！臆病風に吹かれたかホッピー若狭！！浜辺でうろろう歩くヤドカリのようだ！！ホッピー、リング上をうろつき回るヤドカリになりさがったというのかあ！おまえの闘魂は、一体どこへ行ったんだああああ！！」

場内から激しいブーイングが巻き起こっていた。

恵子「どうしたのよ・・・」

工藤「う、う～ん・・・」

工藤は向こうにあるテレビ画面が気になって仕方がない。

TVアナウンサー「あ、ああ！」

考え込むフリをしている工藤は腕組みをしている拳に、思わず力が籠もった。

工藤「あっ、あああ……」

恵子「な、なに！」

工藤「あ……あうあ……」

あっ、いや、ちょっと、足がつった」などと

工藤はゴマカスので必死だ。

若狭、がんばれ、と。

工藤は心のなかで叫んでいた。

アナウンサー「おおっと、ついにホッピー・ダウン！

連敗記録更新かあ！！

起き上がれない、

起き上がれない町おこしだあ！！」

アナウンサーが絶叫している。

解説者「いや、立ち上がりますよ！」

アナウンサー「逃げ回るだけの若狭に、場内から激しいブーイングだあ！」

恵子「どっか具合、悪いの？」

工藤「うん、い、い、いやいや、ああ、な、直ったから。

で、電車でずっと座ってたからかな、ははは……」

工藤は苦笑いを向けたが、

恵子は渋い顔で溜め息を付いている。

カウンターの席で新聞を広げていたマスターは、

ぼんやりとした顔付きで

テレビのチャンネルのリモコンを手を取った。

そしてテレビに、そのリモコンを向けている。

恵子「もう別れたい、ってこと？もう、ここで」

チャンネルを変えられたくない工藤は

思わず立ち上がって

工藤「ああ！」と

大きな叫び声を上げてしまっていた。

マスターと恵子は

ビククリして工藤を見詰めている。

工藤「い、いや、そそそ、その、そっちネズミ！
こ、ここ、こんな大きいやつ、そっち、そっち！」

マスター「えっ！」

恵子も、
顔を歪めて立ち上がった。
工藤は必死だった。

工藤「そっち、あっち、そっち、向こう。
そうそう、そっちそっち」
工藤がそう言うとマスターは
怪訝そうにカウンターの奥の台所に目を向けた。

その時、喫茶店の扉の上につけられていた鐘が
カラン、コロンという音を立てて開く。
学生風の若いカップルが入ってきた。

このカップルだけど、
スーツ a か b、女の子は踊り子がやりますか？

工藤「あ、ああ、お客さんだ。
あっ、い、いらっしやいませ。
マスター、さあ、さあ、お客さん。
早く早く」

工藤は頭をペコペコさげながら
工藤「あっ、どうぞどうぞ、いらっしやいませ」と
若いカップルに向かって、
カウンターの方を手で示した。

工藤「あっ、いや、商売のことを考えてたら、
なんか他人事じゃなくて」

工藤はから笑いを浮かべながら、
また席に着いた。

TVから場内の喝采が聞こえてくる。

恵子「もう、行きましょうよ」

TV「ワン、ツー、スリー、フォー、

ファイブ・・・・」

恵子「なに考えてんの・・・」

すると工藤は、ついに叫んだ。

工藤「ちょっ、ちょっと、ちょっと待って！」

恵子は怪訝そうに、
彼の目の先にあるテレビ画面を、ここで初めて目を向けた。

恵子は険しい顔をしたまま、
黙り込んでいる。

アナウンサー「すごい！これはスゴイ！！
ホッピー若狭、カウンターの電撃右ストレート一閃！まさかのKO勝利！！
明日への奇跡の勝利の掛け橋！！
勝利のレインボー・ブリッジだああああ！！
まさに奇跡の勝利、奇跡の人、
ヘレンケラー的ミラクル・ファイトだあ！！
まぐれ当たりのホッピー若狭！」

アナウンサーの声が上がっている。

アナウンサー「いやあ、私は、
もう、ずっと前からホッピー若狭のことは
大、大、大好きでしてねえ、
これまでも、ずっーと、注目していたんですけどね。
ところで、下町でこよなく愛されている
ホッピーという飲みモノがあるそうですが、
なんなんですかねえ、ホッピーって？」と
アナウンサーは、笑いながら解説者に訊ねた。

解説者「えっ！？」と
驚きの声を上げた。

解説者「あんたホッピー、知らないの？」

アナウンサー「えっ・・・ああ、は、はい」と
アナウンサーは声を詰まらせてしまった。

しかし解説者はハッキリとした口調で言った。

解説者「だめじゃん、それは」

アナウンサー「えっ？」

解説者「あんた、もう、ぜんぜんダメだ」

リング上で若狭は歓喜の雄叫びを上げている。

工藤、TV画面を見詰めて、立ち上がる。

工藤「あの女の子たちが、踊ってる……。

福岡のイベントって、これだったのか？！

あっ、カズミさん、

マッキーさん、ミヤコも！

写真撮ってんの、あの人じゃない！」

女子販売員「ホッピー若狭、プロ初勝利！コングラチーション！それではリング中央で勝利者インタビューです！」

工藤「あ、この声、縦横大学アナウンスぶ—————！」

若狭「やったあー！やったでえ————！！

うおおおおおおおおおおおおおおーっ！！！！

ついに勝った、ついに勝ったでえ！」

工藤は思わず両手の拳を力強く握り締めると、

大声で叫んでいた。

工藤「やったああああ—————！」

若狭「さっきな、ついさっき、産まれたあー！産まれたでえー！

母子共に健康！男の子やあー！！」

マッキー「しかも、双子！」

工藤は拍手をしている。

猛烈に感動してしまって、

大粒の涙をポロポロこぼしてしまっていた。

工藤「そうだあ！！

あきらめちゃいけないだア！

絶対に、あきらめちゃいけないんだよ！！

うん、うん！！」

皆が、啞然とした顔付きで
工藤を見詰めている。
しかし工藤は、人目もはばからずに、
テレビ画面に向かって、
ちから一杯に拍手を送っている。

工藤「この人はね、苦労したんですよ！
ホントに苦労したんですよ！
倒されても、倒されてもねえ、
それでも、がんばってね、
今日、やっと勝ったんですよ！！
そうなんですよ！！
苦労してね、それでも頑張って生きて行けばね、
こうしてパァと、いつかは大きな花が咲くんですよお！！」

そう言いながら工藤は、
ボロボロ泣きながらテレビ画面に向かって
拍手を続けている。
すると、マスターも、若いカップルも、
なんとなくつられてしまって、
そうしてテレビに向かって
拍手をし始めた。

工藤「ばんざーい！ばんざーい！ばんざーい！」

工藤が叫んでいる。
恵子も、つい周囲の雰囲気、
つられてしまってーわけも解らず、
弱々しく拍手をしてしまっていた。

工藤「世の中の人たちはさ、
みんな色々、苦労しながらもさ、
それでも、あきらめずに、頑張ってやってんだよ。
キック・ボクシングだって、
サキイカの人たちだってね、
老人ホームで働いてる人たちだって、販売員だって、駅掌さんだって、
サラリーマンだって、
みんな頑張ってるんだよ。
だからな恵子、オレたちも、頑張らなきゃ。
頑張らなきゃいけないんだよ！
オレたちもさあ、
あきらめずに、人生前向きに頑張らなきゃだめなんだよ！！」

なんか、もう、突拍子もないバカ騒ぎで、
恥ずかしいやら何やらで――
もう、なんだか拍子抜けしてしまった恵子は
おかしくなってしまうと、唐突に吹きだしてしまった。

こうして深刻に悩んでいることの、
なにかもがバカバカしくなってしまうと。

工藤は、そんな恵子の手を取る。
恵子も立ち上がる。

工藤「さあ、ゆこう」

恵子「なんて言うの？」と苦笑い。

工藤「やっぱりさあ、
中華の店でラーメンがない、っていうのが、
いけなかったんだと思うんだよね。
やっぱりラーメンを出さなきゃ。
仲間たちと、もう一度、しっかりと話し合ってみるよ。
やれるさ、絶対に。
その気になれば」

彼の、ほんとうに久しぶりに見たその明るく、
イキイキとした目を見て、
恵子は眉間に皺を寄せながらも、思わず笑ってしまっていた。

若いカップルも、目を見合わせて小さく頷くと、彼らも扉から出てゆく。

喫茶店にマスターひとり。

マスター「はあ・・・」
と、再び暗い顔。
そりゃそうだ。
こんな田舎の片隅の喫茶店、客入り不振。
借金まみれの上、今日は競馬で大損したんだから。
そーいう雰囲気、役者さん、よろしく。

工藤と恵子が去った小さなテーブルには、
あの緑色のライターが残されていた。

ずっと仏頂面をしていたマスターは、
しかし、そのライターを手にとると、
ようやく小さくニカッと笑ってしまったのであった。

「さきいかの恋」★おしまい